



これからの国有林の森林づくりについて (多様な森林づくりの推進) — 伯牙(はくが)たるを目指して —

北海道森林管理局長 新島 俊哉

中国に「琴ならし」という道教徒のお話があります。

大昔、黄河の上流、竜門の峡谷のほとりに、頭はもたげて星と語り、根は地下に眠る銀竜とからまり合っていたという、これぞ真の森の王と思われる古桐があったという事です。

この古桐を伐って不思議な琴をこしらえたそうです。この琴は長い間皇帝に秘蔵され、琴の名手かわるがわるその弦から妙なる音を引き出そうと努力しましたが、

琴から出る音はただ軽梅の音、不調和な音ばかりであったということでした。

ついに伯牙という琴の名手が現れ、御しがたい馬をしずめるように優しく琴を撫し静かに弦をたたくと、

自然を歌えばその古桐の追憶は全て呼び起こされ、恋を歌えば深く思案にくれて

いる熱烈な恋人たちのよう

に、戦いを歌えば琴中に竜門の暴風雨が起こり竜が電光に乘じ鬮々(ごうごう)たる音が鳴り渡ったということ

です。皇帝は狂喜して伯牙に成功の秘訣を尋ねたところ、伯牙は答えて曰く、「陛下、他の人々は自己のことばかり歌ったから失敗したのであります。私は琴にその理想を選ぶことを任せて、琴が伯牙か伯牙が琴か、本当に自分にもわかりませんでした」と。



多様な樹種からなる森林

国有林は平成25年度に一般会計となり、「公益重視の管理経営をより一層推進していくこと」を第一の目的として森林づくりをしています。森林が資源として利用できる時代を迎え、一般会計となった国有林として、今ある針葉樹の人工林を、資源としてしっかりと活用した後「その次の世代の森林をどうするのか」ということを考えなければならぬ時代になってきたということ

です。当然ですが、かつてのよう

に全ての木を伐って同じ種類の針葉樹を

一斉に植栽するということではなく、これからの国有林の森林づくりの使命は、「針葉樹や広葉樹など多様な樹種、年齢で構成された森林をつくっていく」ということです。

これは水源かん養機能の発揮など公益重視の管理経営の観点から必要であるばかり

ではなく、地域の資源政策の観点、すなわち「国有林からはそのロットを生かし、多様な樹種や多様な大きさの木材がそれぞれ一定量供給できるようにしておく」ということから重要なこと

です。ところで、私も国有林では森林づくりの方法について、各森林管理局ごとに一定の品質を確保するために標準化を行っています

が、実はそこに大きな落とし穴があります。定められている森林づくりの方法が一人歩きして、実際の森林を見ずに、ただ決められていることをやってしまうという落とし穴です。

多様な森林をつくるには、自然の力を十分に活用し、生えてきた広葉樹などの木々を、エゾマツ、トドマツ、カラマツなどの植栽した針葉樹と一緒に育ていくということが必要不可欠であり、そのためには、山

とよく相談し、山から教えを請うという姿勢で、山がなりたいたいという方向へ森林づくりをしていかなければならないということです。そう

です、これからの国有林の森林づくりは、私も国有林の職員一人一人が「伯牙となり」竜門の琴である森林から妙なる調べを引き出さなくてはならないのです。

これまでの様々な森林に関する理論は一先ず置いて、すなわち理論を森林に無理矢理当てはめるのではなく、「白紙の心で真摯に森林と向き合い、教えを請う」それがこれからの私も国有林の技術者の姿です。そして、その結果として最終的には、かつて北海道にあった針葉樹と広葉樹が混交した100〜200年生の森林を育てていくという国有林にしかできない森林づくりをしていく考えです。どうぞご期待ください。

天然力を活用した多様な森林づくりについて

計画課

北海道森林管理局では、現在、天然力を活用した多様な森林づくりに取り組んでいます。これは、寒冷な気候下にあつて、均一な人工林として維持していくような森林施業の適地が限られている北海道においては、一種類の針葉樹のみをそだてていく施業を一律に続けていくのではなく、その自然条件によって、針葉樹人工林内で育っている広葉樹を活用するなどして、多様な樹種と樹齢からなる森林を目指すというものです。

今後の取組

来年度から全事業地において本格的に実施することを前提として、今年度には、各森林管理署で少なくとも一箇所は、実際に天然力を活用した森林づくりのための事業を実施します。

これまでの取組

この天然力を活用した多様な森林づくりの取組は、平成30年度から本格化しました。具体的には、局内関係各課でどのような課題があるかを議論しながら、北海道内の国有林を五つに分けたブロック毎に現地検討会を開催しました。現地検討会を開催して分かったことは、同じデータを基にして同じ森林を見ても、そ

の森林の取扱い方については様々な方法があるということです。その中で山と相談しながら最も合自然的で効率的な方法を、実際にやってみることが必要であるということでした。

この「地掻き」(じがき)と呼ばれる手法についても、確実な森林づくりへの活用を目指し、研究機関の成果も参考にしながら、その後の保育方法も含めて検討していきます。



林床に密生するトドマツの稚樹

また、その箇所において、林業事業者等にも参加してもらつ形で現地検討会を開催し、事業の実施に当たつての課題について意見交換を行う予定です。

そして、各署の現地検討会で明らかになった更なる課題やその解決策を、全局的に共有し、来年度以降の本格実施につなげていく考えです。現在、有望と考えて取り組んでいる手法は、人工林の中に既に生えてい

る広葉樹の中上層木を、ある程度まとめて残す森林づくりです。一方、北海道では林床のササをバックホウなどで掻き出してやれば、カンバ類等の広葉樹が生えてくる箇所があります。

その結果、伐採時の作業ルートを設定するなどすればトドマツの稚樹のある程度残せることや、伐採後の光環境の変化によって必ずしもすべての稚樹が枯れるわけではないことなどが分かってきました。

この結果を踏まえて、現在、このトドマツの稚樹を活用した更新方法の指針案を作っています。この指針案について、現場において試行的に取り組むことにより、ブラッシュアップを図っていく考えです。

これらの取組を進めるに当たり、森林調査の効率化も課題です。森林内をくまなく踏査することは、森林を見る目を養うことになりませんが、一方で、ドローン等の先端技術を活用して、より効率的に森林の

状態を把握する手法についても検討していきたいと考えています。

その先に向けて

天然力を活用した多様な森林づくりは、その方法論においても、具体的な事業の実行方法においても、様々な選択肢があります。そうした選択肢の得失を踏まえ、山に教えを請いつつ、現地職員同士が林業事業者の方や研究者も交えながら議論して、新たな手法を模索していくことは、

チャレンジングでやりがいのあることです。広大な大地を相手に、粘り強く自然から学びながら、取り組んでいきたいと考えています。



現地検討会